

幼児の笑いとその保育における意味（3）

三 歳 児 の 笑 い

友 定 啓 子

一・自己像の軸をつくる

二歳児になって「他者の目に映る自分」に気づき始めてきたことを前回のべた。今回三歳児の笑いを見つめてみると、彼らはただ他者の目に映る自分というだけでなく、「どのように映っているか」、もつと言えば「受け入れられているかどうか」ということに敏感になってきているように思う。三歳児は周りの大人の示す期待行動を理解し、それに自分を合わせようと努力し始める。大人の示す方向を一つの支えとして、自己を形成するように思われる。保育をする側から見ると、まとまりを持ってきて、ものわかりがよくなったように感じられる。

① 先生にほめられる

△記録1▽ 先生が爪の検査をしている。子どもたちがテーブルの上に両手を出し、それを先生が一人ずつ点検し、「よし、よし、よし」と言っていく。グループ全員が合格で、四人がいっせいに「やったあー」と歓声を上げる。

△記録2▽ H夫、トイレのスリッパを一人で全部並べてい

る。先生にほめられ、観察者もほめる。その後、トイレに入り出てくるとき、再び全部きれいならべる。満足そうにニコニコしながら部屋に入ってくる。

二歳児も他者の目に気づいてはいるが、どのように映っているかについてはほとんど無頓着だった。しかし三歳児になって、保育者の評価を気にしはじめた。△記録 1▽は爪の検査を受けるので、緊張を伴って我が身を差し出している。明らかにきれいな子も不安げに保育者の顔を見上げているところを見ると、保育者によいと言ってもらうまでは安心できないようである。保育者の一言で自己否定の危機から解放され、思わず歓声があがる。

H夫はトイレのスリッパを並べ、保育者や観察者にはめられた。よい自分が認められたのである。そしてその後もよいと認められた行動を満足気にしている。おそらく、自分はとてもよい子だ、誰に言われなくてもスリッパをきちんと並べることができるし、そのことは先生も知っている、という自信であろう。大人のよい評価で自

分を支える軸ができたのである。

「こういうことをすれば大人に認められる」「こういうことは大人には認められない」ということの積み重ねがある意味では「社会化」の一般的な形式なのであろう。

「認められる行動」のストックをたくさん持っている子は自信を持って対処していくことができる。しかし、中にはあまりに大人の行動期待に添うことに心を砕きすぎて、自分の感情や意志を閉じ込めてしまい、苦しい思いをする子どももいる。一方反対にそのストックがまるでない子どもも、自己のよりどころをもてず混乱し不安定になっていく。保育者の柔軟で多彩な対応が求められるところである。

② 先生に注意されて笑う

△記録 3▽ A子、口に食べ物を入れたまま立ち歩く。保育者に注意されて、A子は首を後ろにそっくり返して笑顔でうなずく。

△記録 4▽ 保育者の説明中にA夫はおしゃべりをしてい

る。保育者「お話ししたい人は外で遊んでもいいよ、かささして。わかった？ A？」A夫は「ハイッ」と下を向いて口は横に開き(笑顔)、すぐそばにいた男児を見てニッと笑う。

ほめられて笑うのは自然なことであるが、興味深いことに子どもたちは注意された時にもよく笑顔を見せる。大部分は下を向いているので、自分に向けられた笑いのだろう。注意され、否定された自分を笑顔で精一杯保持しているかのような。もし、この笑顔がくずれると、自分自身を失ってしまいそうになるのだと思う。その時は泣く。注意される時、子どもたちは二つの情報を受けとっている。一つは注意の内容で、自分に何が求められているのかということ、そしてもう一つは、自分自身は否定されているのかどうかということである。自分に何が求められているのかが伝わらず、ただ否定されていることだけしか伝わっていない時は、その保育は十分であり、時に自信を失わせるだけで有害でさえある。注意されて笑顔が出るというのは、自分をなんとか保持

しながらその注意をうけとめてもいるのだという表明である。

二・集団の中の自己価値―お当番、大人気

△記録5▽ F夫、当番表を見て「やったー！」と片手をあげて、室内をひと走り、ふた走り。M夫、A子も畳のうえをかけ回る。M夫は「やったあ、やったあ！」と室内にひびき渡る声を出す。

△記録6▽ 先生が「当番の人」というと、四人が待ち構えたようにパッと出てくるが、その途中D夫がいすにつまずく。それを見ていたA夫「あほ」D夫「……」A夫「ぼちがあたった」先生の「なんのぼち？」A夫「あたったぼち」

この子どもたちだけでなく、ほとんど全ての子どもが、当番の日を楽しみにしている。この当番の仕事内容は、あいさつと給食の配膳であるが、その仕事内容を必ずしも喜んでいいるわけではない。当番と喜んだ割りにはやることを忘れてしまっていることがよくある。当番にな

ること自体に意味があるようで、ほかの人と自分はちがうんだという意識、自分は当番でない他の人たちよりは価値があるという満足感が、彼らにあるようだ。明らかに他者（クラス集団）の存在を前提にしている。その意味でこの笑いは社会的であると言える。二歳児でもこの当番を喜ぶということは観察されているが、少しニュアンスが違うようである。次の記録は二歳児の時のものである。

△記録7▽ 先生が当番の子どもを呼ぶ。「E子さん、こへどうぞ」と言われE子は「イエイ、イエイ」と得意そうに答える。「F子さん」F子ニコツとしながら「ハイッ」と答える。G子、C夫も答える。E夫はニコとひかえめにほほえむ。G夫はしばらくたつてから、ニコツ。

二歳児もお当番を喜んでいるのだが、その喜びは自分のところどとどまっているようである。三歳児のようにはでなパフォーマンスは見られない。もちろん三歳児が

すべてこのようなことをするのはないけれど、当番であることを他のみんなの中で確認したい、知ってもらいたいという思いがあるようである。それは△記録6▽の、喜んでとび出た当番の子が「まずいた時に、それを見ていた当番でない子が発した「罰が当たった」という言葉にこめられた羨望の気持ちとしてもあらわれている。三歳児になると、集団の中で自分が特別の価値を付与されたことがわかりそのことを誇りに感じるのである。次の笑顔も、自分の価値に関連している。

△記録8▽ 製作中、先生に「J夫、クレパス貸して」と頼まれる。J夫ニコツとして「ハイッ」と返事をし、となりのA夫に「ほらー」と笑顔を向ける。

三．「笑い」による保育

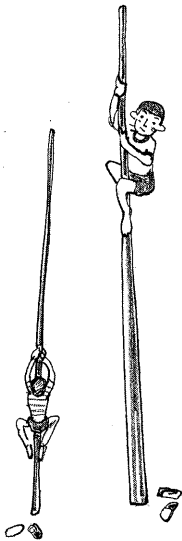
△記録9▽ 朝の集まりの時、シャツがズボンやスカートからはみ出ている子が数人いる。保育者「あの子おかしいて、アッハッハッハッて、笑われるよー。知らん人でも

ねー」それを聞いて、二、三人があわててシャツをおしこむ。その中で一人、A夫はバチンと自分の顔を打つように手でおおって泣く。

身じまいに関する「しつけ」は案外こんな形でされているのが普通ではないだろうか。シャツがはみ出るくらいは当人にとってはどうでもいいことで、ほとんど実害はない。それにもかかわらず、美的な問題として教えねばならないわけだが、理屈では説明がつけにくい。そこで集団の規範からはずれるとして、「笑い」を利用するのである。「笑われる」ことは集団からのずれ、しかもマイナスの価値を意味するので、内容の正否に関係なく非常に強力な力となって当事者に働く。大人社会でも「人様に笑われないように」という、集団の規範からの逸脱を内部規制する力として個々の人々を支配している。結果としてその集団の同一性を保持するのに大きな機能を果たしている。井上忠司は『「世間体」の構造』の中で、「笑いには『社会的制裁』という大切な機能が

ある」ことに触れている。^①

三歳児は前述のように、他者に受け入れられるかどうかに敏感になり、相手に同一化したいという思いを抱いているし、また集団からのずれも理解できるようになっている。それでこのような「笑い」を利用して行動を変えさせることがある程度できることがわかる。しかしこの方法は幼児に屈辱感や疎外感を与えることになるし、記録のように子どもによっては混乱し、うちひしがれてしまうことも起こってくる。このような「笑い」を利用しなくても、保育者の思いを伝える方法を考えていきた



いと思う。

四．価値の内面化―罪意識のカモフラージュ

保育者にはめられたり、注意されたり、また集団の中の自分の位置などに気づいてきた三歳児は、それらの体験を内面化して自分の行動の指針としていくようだ。次の記録はそうした内面化された規範に関連した笑いである。

△記録10▽ B夫がF夫に、ニッコッと笑いながら、足げりをしかける。

△記録11▽ E子とG子が、別の女兒のナフキンをテーブルの下にかくして、二人でニヤニヤ笑っている。

△記録10▽のような笑い、すなわち何か悪いことをしている時に浮かぶ笑いは一歳児や二歳児の時にもごく少数ながら見られた。一歳児の場合は、自分の食べ物がなくなっただけ隣の子のものを食べて、保育者に注意され

た直後のことで、ニッコと笑って同じ行動をしたというものである。また二歳児では、けんかになって思わず相手にかみついてしまい、観察者に止められて、自分で「○ちゃん、かんだー」とニコッと笑って言ったという記録がある。一、二歳児はごく少数であるが、三歳児になると△記録11▽のように複数の子供に共有されることも起こってくる。このように笑いが付随するのは、子ども自身の中にそのように行動したいという気持ちと、しかし同時に「やってはいけない」という意識があることを示していると思われる。「やってはいけない」と思わせるものはこれまでの経験で、保育者に禁じられたという体験であろう。内面化された行動基準ということになる。しかし、やりたいという気持ちを抑えることができなないし、相手や周りのこともある。一方で、笑いは相手との親和関係を樹立する機能を持っていることをすでに感得しているので、笑いすなわち和解を前面に押し立てて、実際には行動してしまおうという非常に複雑な戦略をとっていることになる。この笑いは意識された悪意のカ

モフラージュ作用を持っている。そしてこの笑いは、周りの人間にも作用しているけれども、実は本人自身の罪意識を軽減させその行為を正当化させる機能をも果たしているように思われる。△記録11▽のような複数の子どもたちにこの笑いが共有された例は三歳児になってからのものである。この場合は他者との合意を笑いによって成立させ、その行動が支持されより正当化されている。共犯の笑いである。

「笑い」は、基本的には快や喜びに対応する感情を表現するものである。また、対象との親和関係を形成する機能を持っている。しかし、同時によく知られているように、笑いはこのような悪意や悲しみ、憎しみ、あざけりなどのような否定的な感情に付随することができる。大まかに言えば、これらの笑いはその否定的な感情を軽減する機能を持っている。三歳児がこの笑いの機能を使っているということになる。意識して使っているとは思えないので、ほとんど身体にすりこまれた行動パターンのように思われる。

五. 「おかしさ」「おもしろさ」と笑い

△記録12▽ G子、園庭からもどってきて「おもしろーい、

K先生がまわったー(ころんだ)」と笑顔で報告する。

△記録13▽ 『にんじんばたけのピピブペポ』を読んでもらう。「ババコ、ビビコ、ブブコ」などの子豚の名前を聞いて、あちこちから「ハハハッ」「フフフッ」と笑い声が起こる。

「おかしさ」「おもしろさ」がわかるためには、対象に何らかのズレを発見する力が必要である。「ころばない」と思っていた先生がころんだ。そのずれがおかしいのである。そのずれが大きければ大きいほど、おかしさは増していく。言葉の響きにも敏感である。ふだんの言葉にはない音のつながりがわかるのである。ふだんとは違うということ、そして新しく提示されたものに対して共感できるときに「おもしろい」という感じが生まれる。三歳児になって知的理解力の獲得を背景にこういうことが可能になってきたが、これを他者との関係に利用

し始めるのは四歳児以降である。

三歳児は相手の要望に合わせて行動することができ、それが喜びでもあり、自信にもつながる時である。よい自己像の内実を作っていくこうとしている時期ともいえる。その時にどのような自己像を与えられるかが保育者にかかっている。その子自身に価値があること、その子が本来持っているよさをできるだけ伝え、また、大人としての様々な価値を一人一人の状況に合わせてわかるように伝えていくことが、その子の自己像を支えていくことになると思われる。

(山口大学)

引用文献

- 1 井上忠司著『「世間体」の構造』日本放送出版協会 昭和五二年

第45回日本保育学会大会

講演：大江健三郎・津守真・森田明・原ひろ

子・長畑正道

企画シンポジウム

○保育学のアイデンティティを求めて

阿部明子 他

○保育臨床の視点から園生活を考える

大場幸夫 他

○新しい歴史学と保育研究の接点

太田素子 他

自主シンポジウム

個人あるいは連名の研究発表

ワークショップ

期日：5月16日(土)～17日(日)

会場：東京・お茶の水女子大学